Pinky♥Train
ピンキートレイン
彼女とカノジョのふた百合電車
みずいろめがね

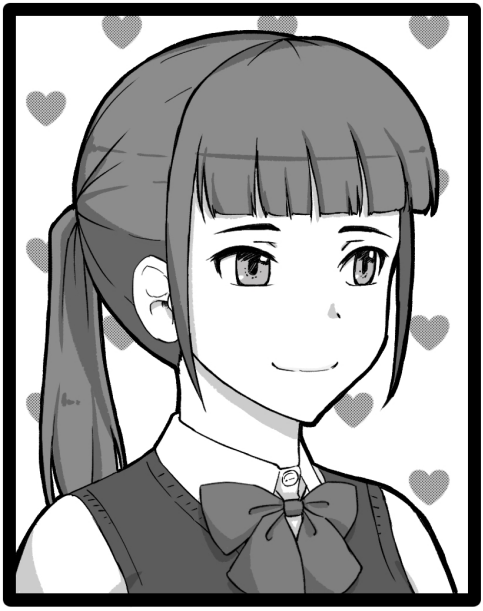
★この小説は成人向けです。未成年の方はお読みになれません。

★内容は全てフィクションです。現実の人物・場所・事象にはいかなる関係もありません。

＜目次＞

☆1日目　女性専用電車で初遭遇♡
☆2日目　お尻コキで初射精♡
☆3日目　憧れの手コキ体験♡
☆4日目　秘密の密着筆下ろし♡
☆5日目　対面立位で駅弁ファック♡
☆6日目　背面座位で初デート♡
☆7日目　貸切電車で公開プレイ♡

☆登場人物☆



❤ 水上 美樹（みなかみ みき）

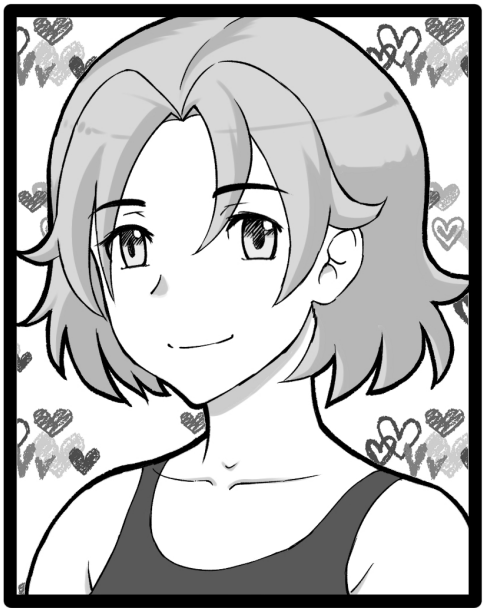
B85 W53 H82

ふたなりJK。巨根。巨玉。
普段は清楚な優等生だが、
その裏では自分の体と
旺盛な性欲に悩む女の子。
はからずも満員電車の中で
JD相手に勃起しセクハラ
してしまう。歳上が好み。

❤ 大橋 萌（おおはし もえ）

B93 W55 H95

好奇心旺盛なJD。セフレあり。
最近はエッチにご無沙汰で
欲求不満気味。本人に自覚は
ないが、バイセクシャル。また
かなりの絶倫で、激しいSEX
に飢えている。
満員電車でセクハラされた
ことをきっかけに新たな世界に
目覚める。歳下が好み。



☆1日目　女性専用電車で初遭遇♡

❤ＪＤ　大橋萌（おおはしもえ）サイド

サワッ…

お尻に、何か当たった。
朝の通勤列車。
いつもの満員電車。
７時３０分発の車内は通勤・通学の人で寿司詰めになってる。
体格のいい駅員が強引に詰め込むくらい混んでいた。
大学へ通うための４０分間の苦行だ。

ムッとする人いきれが漂っていた。

サワッ…

また当たった。
ちょうどお尻の谷間のあたり、デニムパンツに硬い何かが押しつけられている。
鞄ではない。
毎日乗っていれば、触れてくるものが人間の体か別の物かくらいわかる。
（…痴漢？）
反射的に考える。
同時に、かつて経験したおぞましい記憶がよみがえった。
自慢ではないが（本当に）、私は狙われやすい。
ヒップのサイズが９５あるからだ。
見る人が見れば垂涎ものらしい。
ついでにスリーサイズを言うと、バスト９０・ウェスト５９・ヒップ９５。

誰も巨尻など持ちたくないのだけれど、神様のイタズラでそうなった。
電車が揺れる。
途中で線路が歪んでいるらしく、ガタンとかゴトンとか跳ねる。
そのたびに、お尻に何かが当たる。
硬くて、そのくせ柔軟なモノ。
この感触はひょっとしてひょっとしなくても『アレ』だ。
手、ではない。
膝でもない。
【勃起。ペニス。男性器。肉棒。男根。チンコ】
しかも、かなり大きい。
谷間の上の方へ当たるほどなら、少なく見積もっても２０センチ以上。
硬度もなかなかのモノだ。
当たっているのがはっきり分かるほど硬いのだから。
（この…）
頭に血が昇ってきた。

数え切れないほどお触りされた怒りが込み上げてくる。
それと同時に、戸惑いもあった。
（…ここ、女性専用車だよね？）
そうなのだ。
痴漢が嫌だからこそ、毎朝苦しい思いをして女性限定の車両に乗っているのだ。
触られてもいいのなら、普通車のほうがずっと空いている（それでも混むことは混むけど）。
だとしたら、あり得ない現象に遭遇したことにならないか？
（女装男とか）
可能性は、ある。
トランスジェンダーとかいう人がいるらしいので、女装した男が混ざっていてもおかしくはないかもしれない。
（だけど、普通気づかない？）
いくら女装が巧みでも、満員電車の中で至近距離から見られれば、男だとバレそうなものだが…。

（ひょっとして超美形とか）
それも無いわけではないだろう。未知との遭遇より確率は高そうだ。
もし本当にそうなら、捕まえて駅員に突き出さねばならない。
私だけじゃなく、他の女性客にも迷惑だし、危険だ。
これでも昔より鍛えているのだ。
空手2段、護身術も習ってる。
ヤられっぱなしでいるわけにはいかない。
よし。
決意を固めたところで、急カーブに差し掛かった。
グウ〜ンと遠心力が掛かり、その方向へ乗客たちが一斉に押された。自然、外側に近い人間が圧力を受ける。私もその一人だった。
ググゥッ…！
尻に硬いアレがピッタリ着いた。
この野郎。
怒りのボルテージがさらに上がる。

（今にみてろ）

…フワッ……

「…！？」

突然、後ろから花の香りが漂った。

と同時に、背中に柔らかくて重たいモノが押し付けられる。

（えっ）

こ、これは…

いわゆるひとつの、ナニではないか？

【バスト。乳房。おっぱい。パイオツ。お乳。授乳器官】

しかも、かなり大きい。

メロンくらいはありそうだ。

私と良い勝負になるんじゃないだろうか。

（ええええええ）

男だよね？
女装だよね？
美形だよね？（↑こだわる）
でも…この感触は間違いなさそう。いや、女性から乳房を押し付けられる経験はほとんどないのだけれど。
この柔らかさといい、弾力といい、乳パッドとはとても思えない。
それともなにか、胸板のぶ厚い兄貴なんだろうか。ほら「ガチムチ」っていうし。…いや、今背中でグニグニ回ってるぞ。すごく気持ちいぃ…じゃなくって、兄貴の大胸筋にこれは無理なんじゃなかろうか。
（それじゃ、一体ナニ？）
混乱する頭で考える。
痴漢には違いない。
けど、この背中に当たる肉のクッションといい、フワッと匂うかぐわしい体臭といい、その…なんというか、包まれてる感じがする。
そう思ったら萎えてきた。

怒りがスーッと消えてゆく。
そして、あらためて尻に当たるモノに注意がゆく。

スリ…スリッ…スリスリ…❤

…なんか…変な気分。
ジーンズの生地ごしにこすってくる勃起。
電車の走りに合わせて不規則に当たるそれが、谷間に沿って動いた。
(あ……❤)
不覚にも、ジワッ…とくる。
こんな硬いモノを入れられたら…
そう考えるだけで、股間が熱くなってきた。
満員電車で痴漢されてるのに。
ドアに押しつけられながら、逃げ場もなく、容赦なくお尻を愛撫されている。
と同時に、柔らかい肉体がギュウッと背中に触れてくる。

（この前セックスしたの、いつだったっけ…）
一応つき合ってるつもりの彼氏はいる。
まあ、セフレに近いんだけど。
その彼氏君も最近は他の女の尻を追い回すのに忙しいらしく、もう3ヶ月以上セックスしていなかった。
それに授業やバイトが忙しくてオナニーする余裕もない。
それなのに、今、よりにもよって、こんな形で。
「ん…❤」
次のカーブで再び強くプッシュされた時、首筋に生温かい息が掛かった。
興奮したため息がすぐそばで聴こえる。
（…女！？）
それも可愛い声。
いや、男の中にも裏声がきれいな人っているし…。
わけが分からなくなってきた。

私は、潰れたカエルみたいな体勢で、ウェストバッグのポーチから苦労してスマートフォンを取り出し、画面を見ながらカメラを向けた。
スマホには前後にレンズがあるから、振り返らなくても（この場合物理的に無理だし）後ろに誰が居るのか確認できる。
（……えっ？）
本気で驚いた。

私に密着している痴漢は、水もしたたる美少女だったのだ。
ストレートの黒髪と、スッキリした小鼻と、目尻の切れもいい女子高生。
セーラー服の彼女は、少し頬を火照（ほて）らせ、半眼になっている。
どうやら腰の感触に夢中になっているようだ。…いや、本当に？…うん、間違いない。尻に当たるグリッという動きと、肩の位置が連動している。
私の尻に腰を押しつけて、気持ちよがってる。

「…可愛い……」

思わず声に出た。
そのつぶやきを聞いたとたん、ハッと後ろの娘(こ)が我に返る。
そして、私が覗いているスマホに自分の顔が映っているのに気がつき、泣きそうな顔になった。それもまた可愛い。ゾクゾクする。
カシャッ♪
無意識にシャッターを押していた。
と、キーッと電車が制動し、ホームへ滑り込む。グウッと乗客が後ろへ引っ張られ、それから反動で前へつんのめったと同時に自動ドアが両側へ開いた。
ドッと乗客が車内から開放され、折り返しに新しい客が乗り込んでくる。
「…ごめんなさい」
蚊の鳴くようなささやき声が耳朶を打った。
その時にはもう、あのＪＫは降りた客の波に紛れ込んでいた。
私は呆気にとられ、降りることも忘れて、消えた彼女の後ろ姿を目で追っていた。
ドアが閉まり、電車が走り出しても、まだ驚いていた。

v
p
Pa

❤ＪＫ 水上美樹（みなかみき）サイド

最初に、フワッ…と匂いがしました。

女の人の匂いです。
大人の女性の。
すごく…良い匂い。
制汗剤を微かに混じらせた体臭。
女のフェロモン。

（あ…まずい）
直感的に、そう思いました。
どうしてか分かるんです。

セックスの好きそうな女(ひと)が。
わたしは、一度もセックスをしたことがありません。
それどころか、一生しないつもりです。
なぜって…

フワワ…❤

また匂ってきました。
どうやら、目の前のお姉さんのようです。
後ろ姿しか見えませんが、二十歳くらいの、背が高くて、その…スタイルの良い人。
(いけない)
釘付けになりそうな視線を逸らします。
だって、すごく…エッチな体つきだから。
ポールにつかまる手が上に伸びているので、腋がよく見えました。

ノースリーブのシャツを着て、ピッチリしたジーンズを穿いています。
人目に晒すので、腋毛の処理は完璧でした。
ムダ毛が一本もありません。毛穴もきれいに塞いでいます。
私は見とれてしまいました。
女の人の腋が大好きなんです。
ついでに、そこから匂うワキガも。
ちょっとくらい臭いほうが興奮するほどです。
興奮…ダメ、冷静にならなきゃ。
ジロジロ見てはセクハラになっちゃう。
…でも、伸ばした腕と背中越しに、もっと刺激的なモノが見えてしまいます。
横乳です。
腕を上げているのに、後ろからオッパイがはみ出てるなんて、とっても大きいから。
それが、電車が揺れるたびに微かに揺れてるんです。
たまらない眺めでした。

それだけで…下の方が熱くなってしまいます。
（…あ）
もう…反応してる。
昨晩、あれだけ射精したのに。
7回はオナニーしたのに。
それなのにもう股間が硬くなっているんです。

あ、でも、わたし、一応女です。…だと思います。
見た目も体も。
ただ…ひとつだけ、余計なモノが付いてるから。
それが悩みの種なんです。
ペニスの生えた女の子…俗にいう【ふたなり】。

お医者さんに診てもらったけれど、先天性なんだそうです。

切除することもできるけど、その後が難しくて、一生お薬を飲まなきゃいけないとか、ホルモンのバランスが崩れるとか、色々言われました。
それで仕方なく生やしています。
でも、『この子』がまたとっても元気で…。
好みの女の人を見ると、元気になってしまうんです。
つまり、勃起してしまうという……。
こんなこと誰にも言えません。
この子のせいで両親は喧嘩をしたくらいですから。
今は一人暮らしです。
親元から離れて暮らしています。

（あ、また揺れた…❤）
横乳っていいなあ。
わたしより背が高くて、スラリとしたスタイルのいいお姉さん。
あんなにお尻が大きいのに、プロポーションは抜群。

腰のくびれ具合がたまりません。
わたし、どうやら歳上の女(ひと)が好みのようなんです。
クラスメートや下級生の水着や裸を見ても、ほとんど反応しませんから。
お薬も飲んでいますし。
そのおかげで、どうにか学校生活では秘密を守れてます。
…でも、担任の先生や保健医の先生には反応してしまうので、教師は避けていました。嫌な生徒だと思われているでしょう。
どうやら成熟した肉体が好きみたい。
オッパイが大きいとか、お尻が大きいとか…。
けれど、大きければなんでもいいわけではないらしいんです。
巨乳の女性を見掛けても反応しないこともあります。
太ったオバさんにはそそられません。…ナニ言ってるんでしょうね。
とにかく、そういうことなんです。

わたしは緊張しました。

なんとしてでもセクハラは避けねばなりません。
とはいうものの…ここは電車の車内で、しかも満員なのでした。
わたしは茨城県のときわ市からトキワエクスプレスで都内の私立に通っています。女子高で、名門というほどでもなく、公立並みに授業料が安いんです。
わたしの両親はそんなに裕福ではないので、娘にそれほどお金を掛けられません。けれど、わたしがこの体ですので、男女共学は避けたかったんです。
ましてや地元では…。
住んでいるアパートから都内まで快速でも４０分掛かります。
だから乗れる電車は多くありません。１時間に2、３本くらい。
自然に、この満員電車に乗るしかなくなります。
今まではなんとかやり過ごしてきたのですけれど…
まさか、ここで好みの女性と巡り逢うとは思いもしませんでした。

ガタタン…！

電車が揺れます。
わたしは車内の出入り口に近い場所にいました。両側にドアを挟んだ所です。
そこからでは吊り革に届きません。
慣れているので必要なかったのですけれど、この大きな揺れで思わず1、2歩前のめりになりました。
すぐ前のお姉さんへ近づいてしまいます。

サワッ…❤

「…！？」
わたしは、息を呑みました。
スカートの先っぽに何かが当たったのです。
正確に言うと…スカートを押し上げるわたしの、その、ペ、ペニス…が。
いつの間に勃起していたのでしょう。
硬くなったそれがコツンとお姉さんのジーンズのお尻に触れてしまったんです。

その瞬間、ピリッとスイッチが入りました。
軽くこすっただけなのに、思わず射精しそうになるほど気持ちよかったんです。
わたしはとっさに息を殺し、股間にグッと力を入れました。
オマンコがギュッと締まり、ペニスの根本が筋肉で縛られます。
（あぶない）
尿道を性液が昇りそうになった寸前、止めることができました（ちなみに、オシッコをする時はペニスでします）。
お姉さんの肩がピクッと動いた気がしました。
電車がトンネルへ入ります。
車内に電気が灯り、明るくなりました。
ドアの向こうは壁の暗がりです。
そうなると、ドアの窓が鏡になって、向こうを向いているお姉さんの顔が映りました。
（…きれい…）
わたしは見とれてしまいました。

ショートヘアがよく似合う美人です。
美人といっても、冷たい雰囲気じゃありません。
愛嬌があって、ちょっと小悪魔的な感じ。
ものすごく好み。
大きめの唇に薄いルージュを引いているのを眺めると、
（あれでシャブって欲しい…）
無意識に考え、ハッと我に返りました。
いけないいけない。
不埒（ふらち）なことを考えては。
お姉さんに失礼です。
それに、彼女をガン見するのもよくありません。
わたしは視線を逸らし、お姉さんに気づかれないようにしました。…でも、気になるので、どうしてもチラチラ見てしまいます。
スカートの中の勃起は完全に反り返っていました。穿いていなかったら、おへそまで届いたでしょう。

わたしのオチンチンって、硬くなると本当にお腹まで勃(た)ってしまうんです。
歩くとピタンピタン鳴るので、困ってしまいます。
こんな姿、誰にも見せられません。

――――ガタタン！

また、揺れました。
お姉さんのことで物想いにふけっていたわたしは、不意を突かれて、またよろめきました。

サワッ…❤

（うっ）
今度は、もっと触ってしまいました。
お姉さんの背中がビクンと蠢(うごめ)きます。…ああ、知られてしまった…。

怒っているのが肩越しにわかりました。
どうしましょう。
きっと、痴漢だと思われています。
痴女がお尻を触っているのだと。
弁解できません。
それより恐ろしいのは、彼女がわたしを捕まえて、わたしの体を知ってしまうことです。
正体をバラされたら生きていけません。
サーッと血の気が引きました。
なのに、オチンチンの方はもっと硬くなっています。
もうビンビンです。
射精しないのが不思議なくらい。
そのうち、電車が揺れるゾーンへ入りました。
線路の具合がよくないのか、やたらに揺れる箇所があるんです。それとカーブが多く、右に左に振り回されるので、乗客は苦労します。

そうなると、吊り革のないわたしは、自然とお姉さんへぶつかってしまうのでした。

サワッ…サワッ…サワワッ……❤

わたしは思わずため息を漏らしました。

なんて気持ちいいんでしょう…。

形の良い大きなお尻は、二つの肉丘に割れていて、くっきりと谷間ができています。

その谷間へ挟まるように、わたしの勃起が収まってしまいます。

電車の揺れとともに勃起が上下し、肌がこすれて、手コキのような具合になるんです。

（我慢がまんガマン…！）

わたしは必死で射精すまいと集中しました。

すると今度は、グウッと急カーブへ差し掛かり、お姉さんをドアへ押す形で密着してしまいます。
オッパイが背中へ当たり、押し潰されました。
（くぅ）
勃起に加え、また新しい刺激に襲われます。
わたし、胸のサイズは８５あります。
ウェストは５５センチ。
ヒップは８２センチ。
女らしい体型のせいで、なんとかふたなりなのを誤魔化しています。
その８５センチの胸がお姉さんの背中で押し潰されたので、二重の快感が生まれていました。
わたしは意識を腰に集中し、ひたすらペニスの栓を閉めることに専念しました。
ちょっとでも気を抜くとこの場で射精（だ）してしまいそう。
それはわたしの破滅を意味していました。

「…可愛い……」

耳元で声がします。
ハッと目を開けると、肩越しにわたしの顔が見えました。
お姉さんが持っているスマホの画面に。
…そう、彼女はカメラでわたしを見ていたんです。
愕然とするわたしへ追い討ちを掛けるように、

カシャッ♪

スマホのシャッター音がしました。
(撮られた…！？)
絶望するわたしを尻目に、電車が駅に着いていました。
もう耐えられません。

「…ごめんなさい」
そう言ったのかどうか。
わたしは真っ先に電車を飛び出し、駅のホームから駆け降りると、女子トイレへ飛び込んでいました。
個室のドアを閉めて、トイレの蓋を開け、スカートをめくった途端、
ビュッ、ビュゥゥッ！ビュゥ〜〜〜〜〜ッ！
すごい勢いで亀頭の鈴口から白く濁った液体が飛び出しました。
触ってもいないのに射精したんです。
白濁液はトイレの裏蓋に当たり、便座を汚すと、便器の水溜りの中へパシャパシャと注がれました。
生臭い匂いが個室の中に充満します。
「あぐっ❤ うっ❤ くう…っ❤」

わたしは息を殺し、あえぎ声を抑えました。
たっぷり1分間は射精したでしょうか。
腰がガクガク震え、乳首がビンビンに勃起してブラジャーとこすれて痛いです。
いったん射精が止まったペニスは、まだ硬いまま天井を向いています。
わたしはそれを右手で掴むと、無理やり便器へ押し下げ、乱暴にこすり始めました。すぐに排泄感が湧き起こり、二度目の射精が始まりました。

――――ビュビュビュルルルッ！ビュッビュッ！

またもや激しい快感に襲われ、わたしはガニ股開きのみっともない格好でひたすら手コキをし、溜まっていた精液を搾り出しました。二度、三度と吐き出させると、ようやくペニスが縮まりました。
『大』の水で白濁液を洗い流した後、わたしは便座へへたり込んだのです。
（あの人…きれいだった）

痺れる頭で彼女の面影を思い出します。
驚いた顔の、なんて可愛らしい……。
今夜のオカズはきっと彼女でしょう。

☆2日目　お尻コキで初射精♡

❤ＪＤ 大橋萌サイド

今日は、乗車時間をずらしてみた。
乗っているのは同じ女性専用車両。
昨日は痴漢に逢ってしまったけれど、そうそう同じ手を喰うつもりはない。
(絶対オカマだ)
ネットで調べてみたけど、ニューハーフっていう男を女体化した人間がいるんだって。
女になりたい男がなるとか。

女性ホルモンを注射すると胸がオッパイの形に膨れるらしい。それから女のような声になるとか…。
ただし、チンコはしっかり着いている。
これを手術で取る方法もあるみたいだけど、そうなると後が色々大変なようだ。
なんでわざわざ女になりたがるのか、いまいちよく分からないけれど、そういう願望もあるんだろう。
否定するつもりはない。どのみち他人事だしね。
でも、痴漢を許すつもりは毛頭ない。
それは相手が女でも同じ。
(今度会ったらグーパンで殴ってやろうかな)
とは思うものの…
昨日スマホで隠し撮りした写真を見ると、気持ちが萎えてしまう。
…いや、ほんとに可愛い…。
驚いた表情でこちらを見ている少女。
目を見開いて、口を開けて、いささか間抜けなのに、それでもすごい美少女だ。

女性ホルモンでここまでなれるもんかな…？
元が良いんだろう、きっと。
ってことは、すごい美少年ってことになる。
（もったいない）
それならそれで付き合ってやらんでもないのに…。
まあ、想像するに、あんまり美形なのでいっそ女になりたいと思ったんだろうな。
しかも…あの顔で『アレ』だ。
馬並みとは言わないまでも、あの硬さ、あの長さ。太さもきっとある。
胸もしっかり大きかった。
反則だろう、ある意味。
（うーん…ほんとに…痴漢でないならいいのに）
揺れる電車の中でスマホを眺めながら想う。
私は首を振った。

いやいや。冷静になれ。
仮にも女の尻に勃起を押しつけるような奴だ。
絶対変態に違いない。
あの場は逃げようがなかったから仕方ないとはいえ、許しがたい犯罪なのだ。
そういう女を、じゃなかった、男を甘やかしてはいけない。
今度逢ったら警察に突き出すくらいの気持ちじゃないと。
そうだ。こんなに印象的な顔なら忘れようがな…かわいいなぁ…い、いや、そうじゃなくって。
もう一度逢いたいとか思わないから。絶対。

グウッ…！

列車が傾いた。
満員の乗客がいっせいによろめく。

１５分ばかり早めの電車に乗ったけど、やはり満員なのは変わらない。
昨日の７時３０分より遅くなると、次のは８時になってしまう。
それでは授業に間に合わないのだ。
女子大に寮はないし、都内の賃貸は高くて住めない。
電車なら定期で安く済む。
この４０分間を我慢できれば。
とはいえ、こっちの方が混んでいるとは予想外だった。
昨日以上の混雑ぶりに息をするのも苦しい。
この体勢で襲われたら逃げようがな…

…スリッ❤

「！？」
私は息を呑んだ。
忘れるはずもない感触が尻に当たる。

ゴトン！と強く揺れると、後ろから柔らかい肉体が覆い被さってくる。と同時に、あの鼻をくすぐる匂いが首筋に吹き掛けられた。
思春期の女の子の独特の香り…。
ゾクッと背筋が震える。
悪寒なのか快感なのかわからない。
…いやいや、快感はないでしょ。
仮にも痴漢に遭っているんだから。
ゴトン。
また当たった。
前よりもはっきり感じる。
後ろのナニが硬くなっているんだ。
背中に押しつけられる柔らかな感触も。
頭が混乱してくる。
女性ホルモンによる胸部の肥大がこれほどやーらかいモノだろうか。

「…あの、すみません…」

耳元から声がする。

例によって蚊の鳴くような声。

そして微かな息が首筋に吹き掛かった。

またもゾクゾクッとする。

甘い女の子の吐息。

かなり可愛い声。

男の裏声がこんなにも心地良いのか。

「…わ、わざとじゃないんです…」

三度目にぶつかった時、尻の谷間に挟まるナニと、背骨を圧迫するナニと、後ろから首筋にささやくナニが重なり、股間が熱くなった。

頭にきては、いる。

尻に勃起したチンポを押しつけられて喜ぶなら変態だ。

私は変態ではない。…たぶん。

しかし、肉体の方は私の意志を裏切っていた。
ギュウ詰めのご飯のように客同士が押し合う状況の中、後ろのニューハーフらしき者のモノは、尻の狭間にピッタリ嵌まってしまう。その圧迫感が、長らく遠ざかっているセックスを思い出させた。
（バックで犯されたい）
一瞬妄想して、ハッと我に返る。途端に、ジワッ…とわずかに弛(ゆる)んだ股間から愛液が滲(にじ)み出るのがわかった。あわててチャックを閉めるように、尻肉に力を入れて膣口を閉じる。が、さらに一滴、ジュワッ…と漏れた。
くそう。おニューのパンティなんだぞ。
バーゲンセールで買った安物だけどさ。
第一、なんか悔しいじゃない。
私は、出入口付近の吊り革に掴まって耐えた。
周り中から人間の体重が押し寄せてきて、おしくら饅頭になってる。電車がガタンゴトン揺れるたびに揉みくちゃにされ、そのせいで後ろから密着したそいつの肉体がさらに蠢いた。

ズリ… ズリ… ズリ…ッ❤

（うう…❤）

はっきり言って、かなり気持ちいい。

セフレと後背位でセックスした記憶が甦（よみ）える。

バックから貫かれるのは、私の好きな体位の一つだ。

奥まで届きやすいし、チンポを十分に味わえる。

雌犬みたいに犯され、征服される感じも好き。

挿入されないぶん、じれったさが募（つの）る。

それでかえって燃えた。

（く、くそぅ。痴漢なんかに…痴漢なんか…）

ゴトッ！

「…はぁん…❤」

聞こえるか聞こえないかの吐息。

なんて声であえぐんだ。
ほとんど後頭部にくっついている。
いや、肩に顎が乗ってる。
限界まで横目を動かしてみた。
白い肌。ほっそりした顎のライン。桜色の柔らかそうな唇。
これが元男の顔か？
肉の壁に邪魔されながらポケットからスマホを引きずり出す。
片手でカメラを操作し、後ろに向けた。
画面いっぱいに女の子の顔が映る。

スッと細筆で引いたような鼻梁と、長くて繊細なまつ毛。
薄い唇が微かに震え、わずかに口を開けている。今にも涎を垂らしそう。
閉じた目がキツネのような綺麗なラインを描いている。
頬が薄っすらと朱に染まっている。
ほつれ毛が頬にかかり、たまらなく色っぽい。

これが男の顔だとしたら化け物だ。
なんて美しい…。
捕まえて駅員に突き出す気が急速に失せてゆく。
相手が男か女かわかんないけど、まず正体を探る方が先だ。
ゴトン…ゴトン…
ズリッ…ズリッ…❤
尻肉に欲望をそそる摩擦。
背中に乳房の愛撫。
抵抗する気がなくなってきた。
むしろ、自分の尻の方が勝手に動いている。
列車の振動に合わせ、揺れるふりをして勃起へ押しつける。
「……はっ……❤」
少女？の眉がクッと締まる。
それがまた可愛い。

はあっ♥
はあっ♥
ガタタン
ん…♥
はあ♥
ぎゅうう…♥
ズッ♥
ズッ♥
ズッ♥
ガタタン
ガタタン

背中と尻をうねるように動かし、自分から『彼女』に触ってみた。
『彼女』の顔がますます切なくなる。
きっと、私が感じてるのより数倍気持ちいいのだろう。
なんかズルい。
＜次はぁ、終点…お手荷物のお忘れ物などございませんようお気をつけ下さい＞
頭上でアナウンス。
あと1、2分しかない。
思い切って強く押しつけた。
『彼女』の唇があえぐように開いた。
目はまだ閉じている。
ズッ❤ズッ❤…と手コキならぬ尻コキしてやる。
むこうの腰も、いつの間にか小刻みに上下している。
「……んんんっ❤！！」

ありったけの自制心を込めたのだろう、イク時の声は私しか聴こえなかった。
肩に顎が痛いほど押しつけられ、目をギュ〜ッとつむり、唇を噛みしめて耐えている。その色っぽさ。
私はスマホ越しに見惚(と)れてしまった。
尻のジーンズ地にジワッ…と微かに湿り気が伝わった。と同時に、ビクン！ビクン！という、小さいながらも間違えようのないアクメの振動が勃起とオッパイから響いてきた。
不覚にも、また膣口が開き、タラタラ…❤と愛液が漏れる。
下からほんのり青臭い匂いが立ち昇ってきた。
ザーメンの臭いだ。
（やっぱり男？）
思った瞬間、ドアが開いて、盛大に人が車内から流れ出てゆく。それに逆らえず、私は翻弄されつつかろうじて転倒をまぬがれた。

やっと体勢を立て直し、ホームを見渡したけれど、すでにあの子の姿は消えていた。
「…ちっ。」
なんとなく舌打ちする。
スマホを見ると、録画モードになっていた。
スイッチを切って停める。
それからアルバムへ移動し、たった今撮ったばかりの動画を再生した。
あのアへ顔というか、惚けた顔が映し出される。
それを見ただけでジワリと下半身が熱くなった。
私はビデオを停めると、深呼吸し、スマホをしまった。
そしてまだ混乱する頭でホームを歩き、大学へ向かったのだった。

その日の授業はちっとも頭に入らなかった。

帰宅して、夜寝るまでたびたびあの動画を観た。

三度目に再生した時、たまらなくなってオナニーした。
女の顔が映っているだけのビデオで抜くのは初めてだ。
っていうか、私ってレズだったっけ？
そんな事を考えながら、何度も抜いた。

❤ＪＫ 水上美樹サイド

次の日は、ひとつ早めの電車に乗りました。
やはり女性専用車です。
わたしの体のことを考えると、男女共用の普通車は怖くて乗れません。

何も知らなかった子供の頃、小学校のプールの授業でみんなにからかわれた忌まわしい思い出があります。
特に男子の、あのいやらしさと気持ち悪いものを見るのが混ざった目つきは、思い出したくもないんです。
もちろん、女子からも思いっきり引かれました。
両親に話して、転校しました。
家も引越しました。

わたし一人のせいで。
「あなたのせいじゃないわ」と言った時の、お母さんのひどく疲れた顔が目に焼きついています。
自分を責めている顔でした。
どうしてこんな娘を産んでしまったのか…という。
お父さんの方は腫れ物に触るような態度でした。
「良い子だがどう接していいかわからない」と顔に書いてありました。
両親からすれば、わたしはとんでもないお荷物だったんです。

でも、ひとつだけ救いがありました。
地元の評判を聞いて、お母さんがわたしをある病院へ連れて行ってくれたんです。
『病院』という言い方は正しくないかもしれません。
そこは【キャロット・ラボラトリー】…「ニンジン研究所」という風変わりな所でした。

何をやっているのか、よくわかりません。
内科でも産婦人科でもないんです。
所長と数名の女性スタッフがいるだけのこじんまりした施設です。
一応診察され、血液や唾液や尿…おまけに精子まで様々なサンプルを採られました。
レントゲンや大きな円筒型の装置の中へ入れられ、検査されました。
所長さんは３０歳近い年齢に見える若い女性でした。
白衣をまとって、なぜか片目に眼帯を掛けています。
その人…八神ウズメと名乗る女の人は、わたしを診て、「特に問題ない」と言い切ったんです。
「美樹さんの肉体は健全そのものですね。女性器も男性器も正常に機能しています。精子は生殖能力がありますし、子宮も普通に妊娠できますよ」
こともなげに八神先生は言いました。
なんだか当たり前のことを言われているみたいで、変な気分でした。

「ただ、女性と男性の性欲がふたつ同時にあるんで、混乱はするでしょうね。特に美樹さんは女性ですから、男性器の扱いに困るでしょう。
ペニス用の鎮静剤をお出ししますので、それで様子を見てください。
あ、オナニーは普通にやって下さいね。生殖機能を維持するためにも必要ですから。ストレスを緩和する意味もあるので、必ず発散して下さい。
ペニスの切除や、逆にヴァギナを閉鎖して乳房を取るのはお勧めできません。無理な処置は後遺症が残る可能性が高いし、まだ若くて完成していない体ですから。
ま、世の中は広いんで、あなたのような肉体でも全然平気とか、むしろ興味がある人はいるので、気長に構えて下さいね」
今までとはまるで違うことを言われて面くらいましたが、お母さんもわたしもなんだか救われた気がしました。
なんでも、キャロットラボには色々な性の悩みを抱えた人たちが来るらしいんです。

鎮静剤は確かに効き目があって、女子が体育の授業で着替えをしている時に裸を見ても股間が反応しないようになりました。だからわたしの体の秘密は誰にもバレていません。今のところは…。

高校へ進学する時、地元から離れて一人暮らしがしたい、と言いました。そろそろ自活したいし、将来は地元ではない所に就職するつもりだと言うと、両親はホッとした様子を隠し（うまく演技できませんでしたけれど）、賛成してくれました。

お母さんはずいぶん心配して、何度も新居になるマンションと実家を往復して、様子を見に来てくれました。お父さんも時々電話やメールでやり取りしています。「何かあったらすぐに連絡するんだぞ」って、やっぱり親っていいなあと思いました。

それでようやく落ち着いた生活ができるようになったのですが…。

なったのですが…。

な、なったはず…なのに…

今…
お尻がこすれて…
すごく… 気持ちいい…んです…❤
わたしの…アレが、『あの人』の大きなお尻の谷間に挟まって……❤
なんてことでしょう。
この人だけは避けようと思ったのに。
気がついたら目の前にいたんです。
満員電車の中で気がつくということは、すでに手遅れだということです。
案の定、ギュウ詰めの車内で密着してしまいました。
お姉さんの方が背が高いので、わたしは後ろから抱きつく形です。
遠すぎて吊り革に掴まれません。
両手に何も触れない状態で揺れるものですから、自然とお姉さんへ体を預けてしまいます。
わたしは必死に踏ん張りましたが、大勢が乗る電車の中ではそれも無駄な努力でした。

グラッ、とカーブに差し掛かって、思わずお姉さんの腰に両手を置いてしまいました。そうしなかったら、そのまま背中へ倒れてしまったでしょう。雪崩れのように人々が倒れて大惨事です。

わたしの胸が彼女の背中に、腰がお尻に触れます。

みるみるうちに股間のモノが硬くなっていました。

わたしより、ペニスの方がお姉さんをよく覚えているようでした。

弾みのある大きなお尻が受け止めてくれ…いえ、強引に押しつけられます。

すごい感じでした。

とっても気持ちいいんです。

昨日もそうだったけれど、混んでいるぶん今日の方が余計にくっついて、彼女の柔肉がより確かに感じられます。

たっぷりとしたお肉が柔らかく、それでいて芯の強い力でわたしの勃起ペニスを押し返しています。

ジーンズとスカートの生地を挟んで摩擦され、亀頭の裏が刺激されました。

なんて…気持ちのいい…❤

自分の手でシゴくよりも気持ちいい。
想像でオナニーしていた時よりも、何倍も心地よい感覚。
わたしはオナニーをする時…とりわけペニスをシゴく時、いつも女の人をオカズに空想しています。
自分の膣を指で掘る時も、女の子の指でされているのを妄想しているんです。
男子に抱かれるのを想像したことはありません。
男性が嫌いというより、どうやらわたしの性欲は自然に女の人へ向かってしまうらしいのです。
クラスメートのお尻を盗み見ていた時もそそられましたが、ティーンエイジのお尻は少し薄いな…と物足りなく思っていました。
やっぱりお尻は大きい方がいいです。
かと言って、ただ大きければいいというものでもありません。
ブクブクに太った女の人では萎えてしまいます。

ちょうどこの、すぐ目の前のお姉さんのように、腰がキュッとくびれて…やだ、すごくほっそりして綺麗…❤胸も後ろから見えるくらいはみ出ているし…❤うなじも素敵…❤ど、どうして理想の体型の女性が、わたしなんかの前に…

悪夢でした。

もしもセックスするなら、絶対にこんな体型の女性としてみたいのに、その人に嫌われているという現実。

どこの世界に後ろから勃起したモノを押しつけてこすりつける変態がいるでしょうか。

しかも、わたしは女です。

少なくとも女のつもりです。

「…あの、すみません…」

精一杯の勇気を出してささやきました。

「わ、わざとじゃないんです…」

言い訳にもならない言葉を搾り出します。

その時、線路が歪んでいるエリアに差し掛かり、電車はさらに揺れました。
乗客の押し合いがさらにキツくなります。
後ろから体重が掛かり、支える物がないわたしは、いっそうお姉さんへ密着しました。
（ああ…夢みたい）
悪夢が、という点ですが。
でも…こんなふうに押しつけてみたかったんです。
思う存分こすりたいんです。
ジーンズを引きずりおろして膣（なか）に挿（い）入れたいんです。
想像するだけで頭がカアッと熱くなりました。
わたしの勃起ペニスは、ズリ、ズリ、ズリッとお姉さんのお尻に挟まれて動いています。
完全にセクハラです。
きっと逮捕されてしまうに違いありません。

その時。

スリ…スリ…スリッ❤

（…！？）

ありえない事が起こりました。

お尻が、動いているんです。

お姉さんの巨尻が。

わたしではなく、彼女が自ら腰を動かしていました。

信じられません。

セクハラが嫌ではないのでしょうか。

それとも痴漢願望があるのでしょうか。

確かなのは、お姉さんが自分の意志でわたしの勃起にお尻を押しつけている、ということでした。

（いっ…イケません）

腰を引かなくては。
お姉さんにそんなことをさせては。
なのに、わたしの腰は、わたしの気持ちとは裏腹に、いっそう前へ出ていました。
そのうえ、お姉さんのお尻のリズムに合わせて、上下に動いています。
完全に尻コキです。
歳上の女性の臀部(でんぶ)で、勃起ペニスを慰めているのです。
(うそ…どうして❤)
頭が混乱しました。
それでも、うれしかったんです。
彼女がわたしを慰めてくれることが…❤
どういうつもりなのかわかりませんけれど。
それならいっそ…今この瞬間だけ、味わってみましょう。
夢にまで見た女性の尻コキを。
お姉さんの腰に当てた手を、少し強く掴みました。

彼女は嫌がりませんでした。
わたしは、目をつむって、尻コキの感触を楽しみました。
鼻の小穴が開くのがわかります。
耳元にグワングワン血が巡ります。
心臓がドキドキで飛び出しそう。
もう腰を止めることはできませんでした。
膣奥が急速に昂ぶってきます。
それと同時に、ぶら下がっていた睾丸がキュッと締まるのを感じました。
いよいよです。
ペニスの根本から急激に昇ってくる熱の塊。
――ドク、ドク、ドクッ…！
ブワッと亀頭が膨れ上がったと思ったら、すでに出ていました。

パンティを限界まで伸ばした亀頭が、生地を汚し、その上のスカートまで白濁液が滲(し)みてゆきます。
と同時に、生温かいモノが太股を伝いました。
膣穴から流れ落ちる愛液です。
生臭いものがスカートの中に満ちてゆきます。
ガク、ガク、ガク、と腰が震えました。
背骨が溶けそうな気持ちよさ…❤
足の力が抜け、思わずお姉さんに寄り掛かりたくなります。
その場に立っているのが奇跡でした。
頭がボウッとして何も考えられません。
オナニーの何倍も素敵な経験…❤
夢見心地でした。

幸せな時間は一瞬でした。

射精した直後に強い制動が車内に掛かり、すぐ目の前のドアが両開きになりました。
ドッと吐き出された乗客に揉みくちゃにされ、わたしとお姉さんははぐれてしまいました。
流れる人の奔流の中で、必死になって後ろを振り返ったのですけれど、人影が重なってお姉さんの姿は掻き消されていました。
わたしは小さくため息をつき、それから駅のトイレへ急ぎました。
また射精感が高まってきたんです。
個室へこもるなり、便器の蓋を開けて、

ドビュルルルッ❤ブビュルッ❤プピュピュッ❤

延々と射精し続けます。
いったいどうなっているんでしょう、わたしの睾丸は…どうしてこんなに出せるのでしょうか。

八神先生はわたしの陰嚢(いんのう)が通常よりも大きいと言っていました。
「普通は数ミリリットル程度なんだけど、あなたの場合は数百ミリリットルは出るね。再生能力も高いし、ある意味男性がうらやむかもしれない」
なんて、とんでもないことを言うんです。
でも、それだけに、射精の快感はとっても大きいんです。
「あへっ❤ひへっ❤ふへぇ…❤」
みっともない声であえぎながら、わたしはお姉さんのお尻を思い出して、何度も何度も便器へ白濁液を注ぐのでした…❤

＜続きは本編で❤＞